4．書評

『教育の職業的意義―若者、学校、社会をつなぐ』

（ちくま新書）



著者：本田由紀
出版社：筑摩書房
発行：2009 年 12 月 10 日
価格：777 円

今、文部科学省の中央教育審議会の中に「キャリア教育・職業教育特別部会」が設置され論議されている。原因は、西洋先進国から世界の新興国へと市場が大きく変化し、グローバル化が進む中で世界の産業構造や就業構造が大きく変化し、内外価格差や為替の影響による産業の空洞化が進み、国内需要の大幅な減少の結果、若年労働者の雇用が不安定化し、企業内教育が減少した結果、キャリア教育・職業教育の重要性が再認識されている。

この本には、1990 年代に若者の仕事が大きく変化し、非正規社員の増加、不安定雇用、劣悪な賃金の実態を指摘し、多くの若年労働者が、過酷な労働環境に甘んじている状況が書かれている。それは、戦後日本おいて「教育の職業的意義」が軽視され、学校での職業能力を形成する機会が失われてきたことと密接な関係がある。教育学、社会学、運動論の様々な議論を整理しながら、「適応」と「抵抗」の両面を備えた教育の職業的意義をさぐっていく中で、「柔軟な専門性」という原理によって、遮断された教育と社会とをもう一度架橋し、教育という一隅から日本社会の再編に取り組むことが書かれている。

今、キャリア教育・職業教育の重要性を訴える審議会や書物も出始めたが、専門高等学校は厳しい予算の中、単独専門高等学校が減少し、総合制高等学校が増える傾向にあり、逆の動きをしているように見える。

冒頭で述べた「日本で長く見失われてきた「教育の職業的意義」の回復を、広く世に訴える」本書の目的は、つぎのように「序章」の最後で言い換えられている。「問題が山積している現代の日本社会の再編という大きな課題に、教育という一隅から取り組もうとすることであり、魔法のような解決策というよりは、言わば社会の

体質改善ともいうべき地味な提言であることは否めない。しかし、それでもなお、本書で述べてゆくことの必要性について、筆者は確信をもっている。それができるだけ多くの人に届き、受け止めてもらえることを願う」。著者は、教育を手段として、日本社会の再編という大きな課題に挑もうとしている。

それがもっともよくあらわれているのは、本書で著者が主張している「教育の職業的意義」と似て非なる「キャリア教育」という施策・理念であり、またそれと密接に関わる「人間力」や「生きる力」などの概念や発想」にたいしてである。

2009年の1月に開催された中教審第1回キャリア教育・職業教育特別部会における配布資料では、「諮問時における当面の考え方」として「キャリア教育」は「勤労観・職業観や知識・技能を育む教育の内、勤労観・職業観の育成に重点を置いた基礎的、汎用的教育」を意味するとの記載がある。これと対比する形で「職業教育」とは「勤労観・職業観や知識・技能を育む教育の内、知識・技能の育成に重点を置いた専門的・実践的教育」を意味すると定義された。しかし、「キャリア教育」という概念が政策的に掲げられた当初において「勤労観・職業知識」と「職業に関する知識や技能」の両面を含んでいた。また、現実の高校段階における「キャリア教育」は目標や活動が漠然としている中で「自分の将来やりたいことを考えて自分で決めなさい」といった規範や圧力という形で最も浸透していることがこの本からうかがえる。

この本は職業教育を推進する専門高等学校にとつては非常に貴重な本であるが、地球環境問題・人口問題・新興国等の状況を含めた未来社会の在り方や、今後必要な能力をはぐくむ教育の在り方等を含めた職業教育の在り方、現在各校で取り組まれている総合的な学習の時間の「探求」や「起業教育」「具体的な専門高校の教科教育の在り方」に具体的に踏み込まれていたらもっと素晴らしいと思う。

兵庫県立神戸高塚高等学校
教頭 南谷雄司